

II 猛禽類を保護することの重要性

猛禽類は他の鳥類や哺乳類などを捕獲して食物としている種であり、食物である鳥類や哺乳類がたくさん生息していることはもちろんのこと、鳥類や哺乳類が食物とする昆虫や植物も多く生息・生育している良好な環境が保たれた場所でないとは生息することができない。また、生息地の環境の改変がおこるとその場所に生息することが困難となることも多々ある。そのため、猛禽類は地域の生態系の指標となり、猛禽類をその場所の代表として保全することにより、その地域の生態系の保全につながることを期待できる。また、猛禽類は食物連鎖の頂点にいて、大型の種では長寿であるために、化学物質や環境ホルモンなどが生物濃縮により、蓄積されるので、他の種に比べて影響が出やすく、環境汚染の指標にもなる。したがって、猛禽類を保護していくことは、その地域の自然を健全な状態で維持していくことにつながる。

一般にタカ目とフクロウ目の種を猛禽類と呼ぶが、本資料ではそのうちのタカ目の猛禽類を対象とした。日本で記録のあるタカ目の猛禽類は29種で、うち16種が繁殖し(日本鳥学会 2000)、生息環境も奥山から海岸まで多岐にわたる。その中でも里山から低山にかけて生息する猛禽類は人の生活圏と生息域が重複しているので、特に人間活動の影響を受け易く、開発との軋轢が生じている。そこで、里山から低山に生息するオオタカ、サシバを中心にその生態と調査方法についてまとめた。